
S I L V E R !

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SILVER!

【Nコード】

N6547K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

会田花絵は共稼ぎしている。でも、今日はお休みルンルン気分。

40歳の私、会田花絵は仕事休みの日。

小学校5年生の娘と保育園の息子は送って行った。仕事が休みで、夫も子供も留守という幸せを噛みしめるコーヒータム。新聞をゆっくり広げて読むこのひとときは至福の時間。どうってことないテレビ欄、後ろから新聞って読みます。これ、主婦の鉄則。先ずはラテ面から。次は週刊誌の宣伝。

「あれ、ユースの原田君、結婚？ 信じられない。あのお手軽キャラで評判の松下まりなと趣味悪いなあ」

「へえ、子供手当が本当に出るんだ」

「えっ、世間の夫は小遣いが1日700円。ああ、弁当もちだからか。ふーん」

ガタガタ、かすかに聞こえた二階のガラス戸。ウン？ 何の音？ つと立ちがって、2階へと上がって行く。違う、誰かいる。思わず身を隠しながら、スリッパを脱ぐ。ソックスで忍び足で進む。心臓は口から飛び出そう。

子供の部屋からだったと思う。そっと、部屋を開けようすると、後ろから首に手を廻された。

「おい、命が惜しけりゃ黙ってろ、決して声を出すな。出したらここを一突きだぜ」

右のわき腹に何かが当たる。必死で頷く。男はどこから出てきたのだろう。

「今日、人がいるなんて思ってもみななかったぜ。仕事じゃないのかよ」

「なんで、そんなこと知ってるの」

「何でも知ってるぜ。娘の胸にピンクの痣があるだろう。お前はいつもボディースーツを着ているじゃねえか」

本当に凍りつきそうだった。どこから、家族を見ていたの。部屋

だけでなく体まで見ているなんて。身長は高くない。160くらいか、だが、手がすごい力だ。顔はくぐもった声をしてるから何かかぶっているのか。何をされるかわからない、今日は生協が来る日だ。あと1時間もしないうちに来るはず、来て、早く、誰か。

「おい、今日は生協だろ。断っておいたから」

「何で、あなた誰なのよ！　なんでそんなことまで」

「奥さん、お忘れかい。この間、訪問販売断っただろ」

「えっ？」

「1か月前、必死で頼んだのに断っただろう。あの日、あんたがしつこいって呼んだ警備の奴にさんざん調べられて、会社もクビさ。あの日、あの教材を売らないともうどうにもならないようになってたんだ。嫁も子供も出て行ってしまつて。こんなでかい家に住んでるあんたには分らないだろう」

「そんな、この家だって35年ローンよ。子供たちに高い教材買う余裕なんてないわ」

「だが、言っただけだ。これが一つでも売れないと、その日の食事も食べれないって」

「そんなこと言っても。分かったわ。お金出すわ」

「いやあ、もういいんだよ。俺はあんたを一突きして刑務所に行くんだ。そこに行けばもう食うには困らないからな」

「どこから娘や私を見たの？」

「聞きたいかい。息子の部屋の屋根裏さ。息子は母親恋しさでろくに部屋にいないしな。娘も塾でいないし、快適だよ。朝になればときどき風呂にも入ったさ。食事だって困らないさ。少しくらい無くなっても気づかないだろう。新聞もあるしな。もっと早くこの生活をすればよかったよ」

「どうやって入ったの？」

「塾のお迎えに息子を連れていくだろう。旦那はいつも遅いし。偶然裏口が開いたんだよ。初めは小銭をもらうつもりだったけど、屋根裏にはあの24時間換気の調査口があるだろう、あそこから。前

に白アリ予防の換気扇つける仕事してたからすぐわかるんだよ。快適だぜ。暖かいし。いろいろ眺められるしな。奥さんよ」

体が恥ずかしさで真っ赤になって行くのが分かった。何もかも見られているのだ。

「でも、こうやって首を押さえてると、殺したくなるなあ」

そう言いながら、ガムテープで口をふさがれ、ぐるぐると後ろ手にして巻かれた。殺される。この男に怖いものはないんだ。恐怖で頭が割れそうだ。必死で考えた。

「おーい、こんにちわー」

おじいちゃんだ！ 男は羽交い絞めにしながら、音をたてないようにじっとしている。おじいちゃんは鍵を持ってるから、入ってこれる。ガチャって開いた。男がピクリとした。

「花絵さん。ばあさんがこれ食べてって。おーい」

おじいちゃんは、洗濯物を干してるのかなとつぶやきながら上がってくる。男は静かに息子の部屋に私を連れて入って行く。

ベランダを見て、やがて、私たちの寝室へ入って行く。

「花絵さん、具合でも悪いかね」

だが、どこを開けてもいないと見ると、息子の部屋に入ってくる。そう、おじいちゃん、このクローゼットを開けてちようだいと祈りながら。

「ウーっ」

声にならない声を必死で出した。おじいちゃんは振り返ってクローゼットに近づいた。男は声を出されてあわてた。持ってたナイフを握って中から飛び出した。

「この野郎」

と出るや否や、おじいちゃんはそのナイフを持った右手をねじり上げてふっ飛ばした。何が起きたか分からないけど、おじいちゃんがぶっ飛ばしたのだ。63歳の元警官。

「怪我はないか？ 花絵さん」

のびてる男をストッキングで縛り上げると、ガムテープをちぎっ

てくれた。おじいちゃんに抱きついて泣くと、おじいちゃんはケータイで電話し始めた。

「警察かー、私は会田総一郎だ。ここに強盗がいるから、来てくれ」その夜、おじいちゃんたちといつかは同居する話が、急遽来月からになった。そう、私がお願ひしたのだ。おばあちゃんは目を白黒させながら、

「まだ元気だし…」

と嫌がっていたが、どうぞお願いしますと懇願して同居となった。夫は、毎夜3人の女から遅いと小言を言われるようになったと嘆いている。おじいちゃんはそのうちヒーローとして、晩酌を欠かさない。息子もおじいちゃんに柔道を習い始めた。家内安全が一番です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6547k/>

S I L V E R !

2010年10月8日14時25分発行